

HOKUSEI GAKUEN UNIVERSITY  
COMMUNICATION MAGAZINE SPRING EDITION

## 北星学園大学

北星学園大学短期大学部



### 02-03

【特集】  
イラストレーター・絵本作家  
そらさんインタビュー

未来のキャンパスに描く、  
「絵本大国・北海道」の夢。

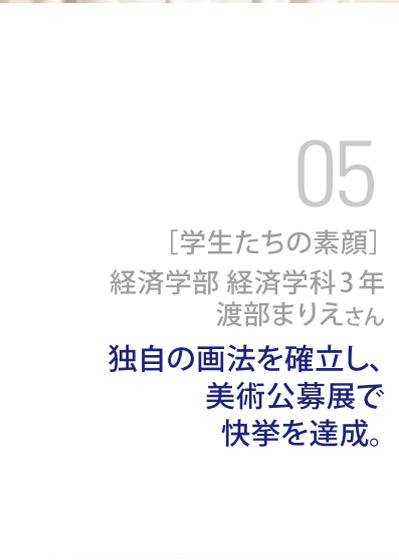


北星学園大学 × 朝日新聞社  
「新聞活用」講座 開設記念特別講演会

### 04

【新しい教育への取り組み】  
新聞活用講座

新聞を通じて  
「読む・書く・聞く・話す」を  
鍛える



### 05

【学生たちの素顔】  
経済学部 経済学科3年  
渡部まりえさん  
独自の画法を確立し、  
美術公募展で  
快挙を達成。



### 06

【OB&OG インタビュー】  
卒業生は、いま。  
トランペット奏者  
古畑 亜紀さん  
喜んでくれる  
誰かのために、音楽の  
スキンシップを贈りたい。



### 07

【先生たちのその素顔】  
社会福祉学部  
杉岡 直人先生  
キーワードは  
「居場所」と「出番」。  
誰もが幸せに暮らせる  
地域づくりを。



### 08

【HOKUSEI INFORMATION】  
北星学園大学からのお知らせ

- ★本学学生所属バンド  
「パレードパレード」  
音楽コンテストで  
グランプリ&文部科学大臣賞受賞
- ★地域も学生も成長できる  
まちづくりをめざして  
歌志内市と本学が連携協定を締結



久しぶりに訪れた母校・北星学園女子中学高等学校にて。思い出話が尽きません。

## 【特集】INTERVIEW

イラストレーター・絵本作家 そらさんインタビュー

# 未来のキャンバスに描く、「絵本大国・北海道」の夢。

JR北海道のICカード乗車券「Kitaca」や北海道観光PRキャンペーンなどの人気キャラクターを手がけるイラストレーター・そらさん。絵本作家でもある彼女の読み聞かせイベントやライブペインティングでは、子どもたちの絶大な人気を誇ります。北星学園女子中学高等学校で青春を過ごし、絵とともに生きる夢をかなえたそらさんの姿は、これから社会に出る学生たちにとって大きな励みとなったようです。

### 友人に恵まれ、のびのび過ごした中学・高校時代

松下：そらさんは私と同じく北星学園女子中学高等学校のご出身と伺いました。当時の思い出などはありますか？

そら：一番の宝物は友だちですね。女子ばかりで気兼ねなくのびのびと過ごせましたし、住む地域や家庭環境もさまざまな同級生に出会い、今まで知らなかった考え方や世界を知って、たくさんの刺激を受けました。初めて聖書にふれたのも中学に入ってから。聖書の時間は神聖な気持ちになって、人間としての生き方や考え方を学べるのが好きでした。聖書が説く自己犠牲の尊さを描いた三浦綾子さんの作品「塩狩峠」に強い衝撃を受けたことは今でも覚えています。

佐藤：絵はいつ頃から描き始めたのですか？

そら：幼稚園の頃から絵を描くのが好きで、絵の上手い父に憧れて練習したり、母にほめてもらいたくてひとりでもコツコツ描いていました。でも絵画教室や美術部などの経験はあまりないんです。小学6年の時に一度油絵教室に参加したことがあるんですが、自分より上手い人がたくさんいたので自信がなくなり、足が遠のいてしまって……でも中学・高校の美術の授業は楽しかったし、友だちに頼まれて似顔絵や学校祭のポスターなどを描いていました。

松下：プロを目指したきっかけは何だったのですか？

そら：高校在学中は絵の道に進むことを諦めていたんですが、卒業してから将来の人生を考えた時、やっぱり絵を描いて生きていきたい！という気持ちが湧き上がってきました。それからというものアルバイトの合間に絵を売り込んで歩き、少しずつ絵の仕事



もらうようになりました。生活するためにモデルやレポーター、バーテンダー、大根の皮むき、荷物の宅配、料理教室の講師などありとあらゆるバイトをして、それでもお金がなくておしゃれもできなかったけれど、絵という夢があったから全然苦ではなかったですね。

### 北海道の魅力为全国へ、世界へ伝えたい

佐藤：絵やイラストのアイデアが浮かぶのはどんな時ですか？

そら：個人制作の場合は友人とおしゃべりしたあとに空想をふくらませたりしますが、仕事の場合はオファーの電話を受けた時から考え始めています。「北海道観光PRキャラクターを作りたい」と依頼の電話があった時、相手が「エゾシカ、キツネ……」と北海道の動物の名前を列挙するのを聞きながらスケッチしているうちに出来上がったのが「キュンちゃん」でした。このファーストインプレッションの有無が、仕事に取り組む上でのひとつの目安になっています。

松下：キュンちゃんやKitacaのエゾモンガなど、そらさんが生み出したキャラクターは多くの道民に親しまれていますね。

そら：ほんとうにうれしいし、ありがたいことだと思っています。北海道を代表するキャラクターを描かせてもらうのは責任の大きい仕事でしたが、描くことを通じて北海道のためにもっとできることはないか、と考えるようになりました。

佐藤：東京のお仕事もされているようですが、拠点はやはり北海道ですか？



アトリエでの制作風景はメディアの取材を受けることも多いとか。



自らがけた北海道観光PRキャラクター「キュンちゃん」と一緒に。



## PROFILE

そら

1978年札幌市生まれ。北星学園女子中学高等学校卒業後、北海道を拠点に絵本作家・イラストレーターとして活躍中。JR北海道ICカード乗車券「Kitaca(キタカ)」のキャラクター「エゾモンガ」、北海道観光PRキャラクター「キュンちゃん」などを手がけているほか、自身の絵本による子どもたちへの読み聞かせやライブペインティング、各種メディア出演など多方面での活動も展開。近年では、画家としても作品を手がけ、さらに活動の幅を広げている。主な著書に、「WITH YOU ～ 大好きな君へ～」(MG BOOKS)、他多数。

公式サイト「SORA's official web site」  
<http://sora-office.com>



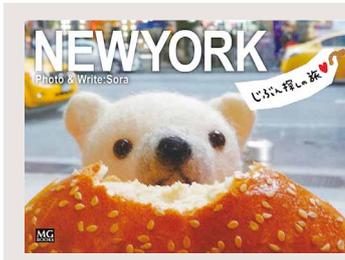
さとう あやみ  
佐藤 彩美さん

文学部 英文学科 4年 (藤女子中高出身)  
 女優を夢みる私にとって、自分の力で夢をつかんだそらさんのお話はとても参考になりました。「絵本を通じて北海道を元気にしたい」というそらさんの夢が、北海道から全国へ、世界へ発信されていくのが楽しみです。



まつた ゆか  
松下 由佳さん

経済学部 経済学科 4年(北星学園女子中高出身)  
 母校の先輩が活躍される姿を誇りに思うとともに、高い目標に向かって努力続ける生き方に女性として憧れを抱きました。「夢を人に伝えることで夢に近づく」というお話が強く印象に残りました。



### 人気シリーズ「しろくまくん」の新作がまもなく登場!

ぬいぐるみの「しろくまくん」が主人公の人気シリーズ最新作の舞台はニューヨーク。ほんとうの自分を捜して海を渡ったしろくまくんの冒険を、そらさん自ら撮影した写真とやさしい言葉で綴っています。  
 出版社：MG BOOKS  
 発売日：2014年4月上旬予定

そら：かつては「イラストは東京じゃないとできない」と言われましたが、いまは北海道から全国に向けて作品を発信することも可能です。大好きな北海道に軸足を置いて、北海道ならではの魅力を伝えていきたいですね。先日のニューヨーク旅行にも自作のぬいぐるみ「しろくまくん」を持参したところ、たくさんの人に話しかけてもらって仲良くなれたんです。キャラクターは言葉がなくても世界中の人と心を通わせられるんですね。今後は海外にも北海道発のキャラクターを発信したいと思っています。

松下：私は大好きなミュージカルが盛んなトロントへ、佐藤さんは女優の勉強のためロサンゼルスへそれぞれ約1年間留学しました。海外で得た経験は素晴らしいものですが、そらさんもニューヨークから得たものはありましたか？

そら：創作面では確実に影響を受けました。ニューヨークで得たインスピレーションは、今後の作品制作にも反映されていきそうです。創作活動で現状に満足してしまうと、知らないうちに作品のパワーもクオリティもダウンしてしまうもの。拠点は北海道でも視線は世界にも向けて、高い目標意識を保っていたと思います。

佐藤：画家の夢を実現したそらさんなら、確実に世界に近づいていけそうです。夢をかなえる秘訣は何でしょうか？

そら：大切なのは「こうなりたい」と口に出して言うこと。そして自ら行動を起こすこと。内に秘めていても誰も気づいてくれないけれど、言葉や行動を通して周囲に知ってもらうことでチャンスを運んでくれる出会いもある。夢を語る人は実現の手前まで来ていると思いますよ。

## 子どもたちのために、やさしく温かい物語を

佐藤：そらさんは絵本の読み聞かせで子どもたちにも人気ですね。

そら：トラック輸送の役割を伝える絵本を作った際に「絵本と作者が一体となって物語を届けてみては」と勧められ、読み聞かせに取り組み始めました。最初は緊張したけれど、子どもたちのキラキラした純粋なまなざしを一身に受けて、今まで味わったことのない温かい気持ちになりました。幼い頃、たとえひとりでも絵本を読んでいろいろ空想しているだけで楽しくて、寂しくありませんでした。私自身が絵本からもらったやさしさやぬくもりを、今度は子どもたちに伝えていきたいと思っています。

松下：今後の活動についてお聞かせください。

そら：私の夢は北海道を世界に誇れる「絵本大国」にすること。絵本の制作はもちろん海外交流も進めていきたいと思っています。絵本を通じて大人も子どもも笑顔になれる、ハッピーな北海道にしていければと思っています。

佐藤・松下：本日はありがとうございました。



# 新しい教育への 取り組み

## 新聞を通じて「読む・書く・聞く・話す」を鍛える 新聞活用講座



【新聞活用】講座開設記念特別講演会のようす(2013.11.9)

本学では、2007年より朝日新聞社との提携による寄付講座『メディアと社会』を、全学生を対象に実施してきました。東京の朝日新聞社の編集委員や主幹などを講師に迎えて行われる講義は学生の評判も上々。「これまで新聞を読んでいなかったけれど、講義をきっかけに新聞を購読し始めた」という声も聞こえるようになり、学内においても新聞を活用したカリキュラムを模索する動きが出始めました。こうした中、朝日新聞社が教育分野の事業統括部門として新設した「教育総合センター」の協力のもと、「新聞活用講座」がスタート。講座を担当した原島正衛先生に、1年間の取り組みと成果について語っていただきました。

## 全国に先駆けた本学の取り組みが、 大学教育の未来を変えるかもしれません。



北星学園大学 経済学部長  
ほらしま ませえ  
原島 正衛先生

「新聞活用講座」は経済学部経済学科の1年生の必修科目として開講。学生に朝夕宅配される朝日新聞から任意の1記事を毎日切り抜き、毎週金曜日の授業で時事問題に関する小テストや記事に関するコメント作成、グループディスカッションやプレゼンテーションなどを行います。すなわち「読む・書く・聞く・話す」というコミュニケーションの基本をすべて実践するわけです。プレゼンテーションは就職活動にも役立つほか、朝日新聞社のゲスト講師による特別講義や、海外で活躍する卒業生が新聞を通じた学びの体験を語るスカイプ講義など、就職や進路に対するモチベーションを喚起する機会も設けています。

1年間の「新聞活用講座」の成果ははつきりでした。受講学生に「ことばの力」をはかる「語彙・読解力検定」を受験させたところ、社会人の受験者も多い準2級では6月の受験で全国平均の合格率を確保し、11月の検定試験では社会人として平均的な能力を持つとみなされる2級合格者は41名。授業を重ねるごとに切り抜く記事の内容もコメントも充実し、広い視野と深い思考力が育まれていることが伺えました。

新聞社の協力により宅配購読を取り入れた講義は全国でも例がなく、本学の事例は大学教育の新たな可能性をひらく試みとして注目を集めています。次年度からは選択科目としてより高度な授業を2年生向けに展開するほか、新聞活用に意欲的な他大学との連携を通して教育メソッドの共有もはかっていきたいと考えています。

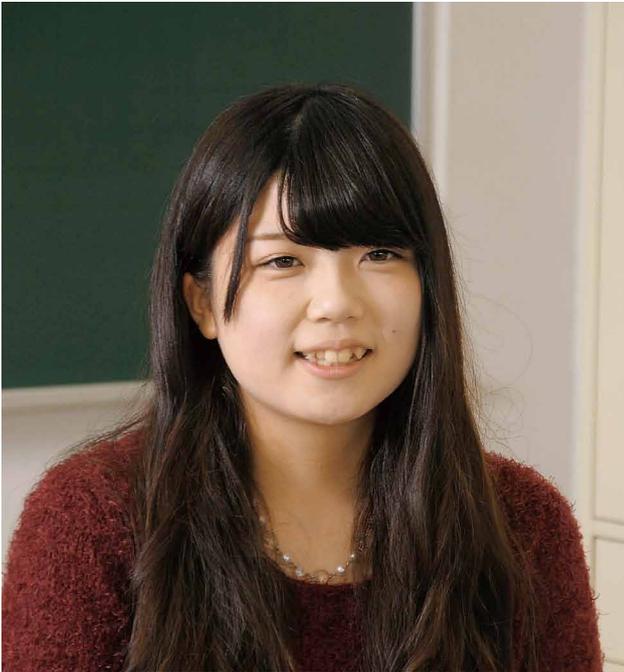
### 【新聞活用講座を受講して】

就活や今後の人生に役立つ  
手応えを感じました。



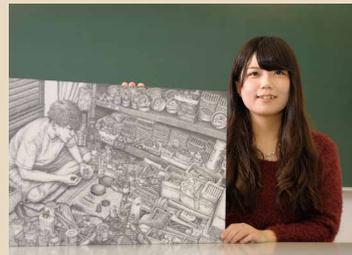
経済学部 経済学科 1年  
さわぐち としき  
澤口 隼規さん  
(大麻高等学校出身)

もともと政治やサブカルチャーの記事をよく読んでいましたが、それだけで講義を受講してもつまらないと思い、経済面なども積極的に読むようになりました。大変でしたが経済の面白さが少しわかったし、社会の諸問題や働くことの現実を学ぶことができたと思います。ありのままの情報に自分なりに咀嚼し、自らの考えを含めた情報に昇華させる作業は、就活や今後の人生に役立つ手応えを感じました。じつは若者が興味を持てるコラムなど多いのに、新聞＝堅苦しいと思われがちなのはもったいない。これからの新聞の変化にも注目しつつ、今後も読み続けたいと思っています。



## 独自の画法を確立し、美術公募展で快挙を達成。

2月13日、北海道美術協会が15歳以上21歳以下を対象に公募する「第7回 道展U21」で、本学経済学部経済学科3年の渡部まりえさん(札幌西高等学校出身)の作品「星降る街」が準大賞を受賞しました。渡部さんは昨年11月にも、インターネット広告代理店・GMOアドパートナーズ主催の全国学生公募展「GARDEN GRAPHIC」で最優秀賞を受賞。美術を専攻する学生が大半を占める中で、頂点に立つ快挙を遂げました。



わたべ  
渡部 まりえさん  
経済学部 経済学科 3年

- 主な受賞歴
- 2013年4月 中札内美術村企画公募展  
「はたちのりんかく」入賞
- 2013年11月 全国学生公募展  
「GARDEN GRAPHIC」最優秀賞受賞
- 2014年2月 第7回 道展U21準大賞受賞
- 2014年3月 2013年度北星学園大学賞受賞

### 自分らしさを生かせる独自の画法を確立

「幼い頃から絵を描くのが好きだった」という渡部さん。家族や先生、友人にほめられるのがうれしくて描き続け、中学2年の時に「絵と文による冬休み読書大賞」に入賞。公に評価される喜びを知り、高校進学後は美術部で油絵に取り組み始めました。そこでひとつの壁にぶつかります。「油絵は「ここまで描いたら完成」という線引きがしにくく、性に合わないと感じました」。自分らしさを生かせる表現方法を求めて模索を続け、やがてたどり着いたのが点描によるペン画でした。「ペン画はあらかじめ完成形が予測できるし、点描で全面を埋め終わったときの達成感がある。自分に向いていると感じました」。

### 世界でただひとつの絵を残したい

渡部さんが描くのは、写真集や雑誌などからモチーフを抽出して頭の中で組み合わせ、どこにもない風景。下絵ができたらアルコールマーカーで彩色し、絵の全面に油性ペンで緻密な点描を重ねていきます。その繊細かつ幻想的な世界は油絵が主流の道展U21において大きな注目を集め、高い評価を受けました。「点描は集中力が必要なので、寝る間も惜しんで1日15時間描き続けることもあります。大きいキャンバスに向かい、地道に描き続けるのはつらいときもありますが、複製できない点描画は世界でただひとつ形に残るもの。そして完成した絵をたくさんの人に見てもらいたいという思いがモチベーションになっています」。

### 絵で自分と対峙し、仕事で成長したい

絵と同様に、勉学にも全力を注ぐ渡部さん。卒業後は子どもの教育に携わることを夢みて就職活動にも意欲を燃やしています。「私にとって絵は生活の中心ではなく、自分自身と対峙する大切な時間。子どもと一緒に人間として成長しながら、細く長く描き続けていきたいです。いつか道展本展に自分の納得のいく作品を出してみたいですね」。大きな受賞で得た自信を糧に、渡部さんの前には希望で彩られた未来スケッチが着々と描かれています。



第7回 道展U21準大賞受賞「星降る街」



全国学生公募展「GARDEN GRAPHIC」最優秀賞受賞

# OB & OG Interview

卒業生は、いま。

喜んでくれる誰かのために、  
音楽のスキンシップを贈りたい。

トランペット奏者として札幌を拠点に活躍中の古畑亜紀さん。本学在学中からプロを目指して研鑽を重ね、音楽大学出身者が大半を占めるクラシックの世界へ踏み出した古畑さんが、音楽への思いや学生時代の思い出などについて語っていただきました。



北星学園大学チャペルにて

ふる はた あ き  
古畑 亜紀さん

1994年北星学園大学文学部社会福祉学科心理学コース卒業。北海道大学大学院地球環境科学研究科修士課程中退。1996年日本トランペット協会および国際芸術連盟のオーディションに合格。1998年日本現代音楽賞、2010年アジア国際コンサート優秀賞など受賞多数。国内外の演奏会出演やソロコンサート、映画「Hungry for Love」テーマ音楽担当のほか、トランペット講師も務めるなど多方面で活躍中。

## 演奏を喜んでもらえる うれしさを知った学生時代

トランペットとの出会いは小学生の頃。気管支が弱かったので鍛えるためにと親に勧められたのがきっかけでした。中学・高校はスポーツに熱中し、再び始めたのは大学に入ってから。吹奏楽部の先輩の誕生日に『Happy Birthday to you』を演奏したらすごく喜ばれ、もっとうまくなりたいと思ったのです。その後、札幌交響楽団の松田次史先生に師事し、プロを目指して猛レッスンを開始。それまで練習熱心ではなかったので、周囲が驚くほどの変貌ぶりでした。

キリスト教の精神が息づく北星学園では、音楽以外にもたくさん学びを得られました。独特な校風のもと、周囲と協調しながら丁寧なやり方で信頼関係を築いていく謙虚さが浸透していたように思います。社会奉仕の精神や他者の信念を敬う心、人との関係の中で自分が生かされる喜びも、人生の支えとなってくれました。また、演奏家としてのセルフプロデュースにも、専攻していた産業心理学のメソッドがとても役に立っています。

大学卒業後は北大大学院で学ぶ傍らオーディションを受け続け、1996年に国際芸術連盟新人コンサートオーディションに合格。現在は生まれ育った札幌を拠点として、国内外のオーケストラや室内楽演奏会、ソロコンサートのほか後進の指導にもあたっています。

## トランペットを自分への約束として 「いま」を生きる

20代は目の前のオーディションやコンクールだけで精いっぱい、将来のことを心配する暇もありませんでした。とりえず演奏予定がわかっている2年間だけ頑張ろう、2年経ったらまた2年……その繰り返しで今に至っています。長い人生ずっと頑張る続けることは難しいけれど、目の前の2年間だけ頑張ればいい、と思えば気が楽になるもの。遠い将来に目標や着地点を求めるのではないものねだりのように思うので、トランペットを生活の軸とすることを自分への約束とした上で、いまここにある出会いや出来事を大切にしたいと思っています。

私にとって音楽はスキンシップであり、生きる力を与えてくれるもの。音の振動は、耳だけでなく体にも伝わりますから、音を届ける時は丁寧かつ慎重に、ハグするようにおほかでフレンドリーでありたいと思っています。プロとして演奏する中で芸術性とビジネスとのバランスに悩むこともありますが、トランペットは自分の心を守ってくれるだいたい道具であり、武器のようなもの。ビジネスに直結しない部分も大切にしながら、私だけのオリジナリティのある演奏で誰かに喜んでほしいですね。覚えてた『Happy Birthday to you』を演奏し、喜んでもらえるうれしさを知った北星学園大学のキャンパス、ここが私の原点です。



オーケストラ伴奏でソリスト担当(於：札幌コンサートホールKitara)。札幌トランペット協会では理事を務めています。



2007年に発売した初のソロアルバム「コンサート・ピース」。

## Featured Faculty Member

### 先生たちのその素顔

● 社会福祉学部 福祉計画学科 杉岡 直人先生 ●

キーワードは「居場所」と「出番」。  
誰もが幸せに暮らせる地域づくりを。



## PROFILE

すぎおか なおと  
杉岡 直人

1949年恵庭市出身。1976年北海道大学大学院文学研究科社会学専攻修士課程修了(文学修士)。北海道大学助手を経て本学専任講師に着任し、1994年より本学教授。福祉社会学会副会長、北海道地域福祉学会会長、北海道地方社会保険医療協議会長、特定非営利活動法人北海道NPOバンク理事長、公益財団法人コープさっぽろ社会福祉基金理事長などを務める。

〈主な著書〉

- 『ピギナズ地域福祉』(有斐閣・2013年/編著)
- 『協働性の福祉社会学—個人化社会の連帯』(東京大学出版会・2013年/分担執筆)
- 『農村地域社会と家族の変動』(ミネルヴァ書房・1990年/単著)

### 研究の原点は「農村家族の近代化」

かつての農村社会は戦後の民主化の流れとは裏腹に、農家では家長がすべてを仕切り、息子も嫁も経営に参加させてもらえず、家族員の労力はタダ扱いとなっていました——学生時代に農家・農村調査に参加してきたことがきっかけで、「農村家族の近代化」についての研究活動をスタートしました。ただ、封建的にみえる農村社会でも、民主的なルールは存在しており、村全体で弱者を支え、みんなが生きていけるしきみがあったのです。こうした共同体としての農村のしきみは、人々が支え合って生きていく地域づくりのヒントになりそうだと考えるようになり、地域福祉を研究することにつながりました。

### 「居場所」と「出番」を創造する

「つながる幸せ」こそ地域福祉のキーワードです。年齢や障がいの有無に関わらず、すべての人が安心して暮らせる地域を作るためには、つながるしきみ作りが不可欠です。そこでいま注目されているのが「居場所」と「出番」です。子どもやお母さん、高齢者、障がい者などがほっとできる「居場所」を確保することで、人の輪が生まれます。子育てサロンや高齢者いきいきサロン、地域若者サポートステーションなど札幌にもたくさんの「居場所」がつけられてきています。最近は廃校や商店街の空きテナントなどを活用する動きも出ています。こうした場所に人が集まることで地域の活性化にもつながる上、高齢者が子どもに勉強を教えたり、障がい者と一緒にものづくりなどを行うことで、地域の人々の「出番」が生まれます。役割を担い、誰かの役に立つ喜びが、その地域で暮らす幸せにつながっていくのです。

### 歌志内市と連携して地域福祉を実践

福祉計画学科のコミュニティワーク実習では地域福祉実践研究の一環として、2008年に歌志内市の高齢者の生活実態調査を行って以来、現地の皆さんと交流を続けています。学生はその土地の食や文化の魅力にふれることを通して地方都市の地域福祉について関心を深めています。こうした交流を重ねた結果、2013年には歌志内市と本学との連携協定が結ばれました。今後は歌志内市の福祉政策を含め、まちづくりに協力していく予定です。ところで農村の人間関係や地域福祉を見つめてきた私が考えているのは「国民楽農主義」の勧めです。みんなで自然に親しみ農産物を作り、高齢者や障がい者が働くコミュニティレストランに持ち寄って料理を作り、みんなで食べるといった機会に雇用を結びつけることをライフワークの集大成として取り組んでいます。



近著『社会調査事典』(丸善出版・2014年/項目分担)ほか著書多数。



歌志内市と大学の連携協定につながったコミュニティワーク実習の合宿調査



## TOPICS

### 本学学生所属バンド「パレードパレード」 音楽コンテストで グランプリ&文部科学大臣賞受賞

2014年1月12日(日)、東京で開催された音楽コンテスト「第7回ミュージックレボリューション」(ヤマハ音楽振興会など主催)の決勝大会「ジャパンファイナル」で、本学文学部英文学科4年・松本晃貴さん(札幌開成高等学校出身)がリーダー&ギターを務める4人組バンド「パレードパレード」が全国4,599組の頂点に立つグランプリを獲得しました。審査員からは歌唱力と演奏のクオリティ、楽曲の完成度が高く評価され、後援の文部科学省から文部科学大臣賞が贈られました。

「パレードパレード」は2012年2月に結成。プロを目指して音楽活動を展開し、昨年10月に行われた本学の大学祭(星学祭)スペシャルライブをはじめ、市内各所でのライブ活動やCDの自主制作を続けてきました。松本さんは「人からの紹介や仲間の縁で出会い、互いに気が合うと感じた4人で活動をスタートしました。歌詞・メロディー・アレンジ全てに全力を注いだエントリー曲『Say yes my darling』で、2年間で最も大きな成果を出すことができてうれしいです」と喜びを語ってくれました。

「パレードパレード」の演奏の様子は「ミュージックレボリューション」オフィシャルホームページで映像配信中です。



▶「ミュージックレボリューション」オフィシャルホームページ  
<http://www.musicrevolution.jp>



▲「ジャパンファイナル」本番ステージで全国一の演奏を披露。



▲「ジャパンファイナル」グランプリメダルを手に記念撮影(右端:松本さん)。



▲2013年に自主制作したCD。

## TOPICS

### 地域も学生も成長できるまちづくりを めざして歌志内市と本学が 連携協定を締結

北星学園大学および短期大学部は歌志内市との間で連携協定を締結。2013年10月30日に同市役所で調印式が行われました。協定には、歌志内市の福祉や教育、産業、文化振興の施策の充実に向けて本学の研究成果を積極的に活用するとともに、市側も本学の研究機会に協力することなどが盛り込まれています。

歌志内市と本学の交流は2008年、社会福祉学部福祉計画学科の杉岡直人教授がコミュニティワーク実習の一環として同市内の高齢者生活実態調査を行ったことがきっかけでスタートしました。過疎化が進む歌志内市の高齢者にとって、若い学生たちの来訪は新鮮な楽しみであり、学生にとっても地域福祉のあり方を肌で学ぶよい機会となっています。大学教育の観点から学生の人間の成長を願いつつ、今後はさらに連携を強化し、住みよいまちづくりのために全学的協力のもと行政全般にわたって貢献していく予定です。



協定書調印式で、本学の田村信一学長(左)と村上隆興歌志内市長(右)